

マスターズを彩るレジェンドたち(26)

2月の次は弥生の3月。3日のひな祭りの後、12日の奈良東大寺のお水取りが過ぎると、いよいよ春の足音が——。20日は春分の日。マスターズの皆さんのトレーニングの息吹も高まる季節だ。今月は陸奥の陸中(岩手)にマスターズ陸上競歩を導入、普及に情熱を燃やしている人と、2023年6月に地元選手権の100mで健闘した95歳の女性シルバー・スプリンターをお披露目しよう。

写真提供／岩手マスターズ陸上競技連盟

競歩を支援する岩手マスターズ会長 八重樫輝男さん(84歳・岩手)

岩手はマスターズ陸上の競歩の聖地と言っている。2005(平成17)年から行われている全日本マスターズ競歩大会は、日本陸連公認競歩路である北上市の総合運動公園内で行われている。

なぜ北上で。日本のロードウォークの公認コースがあるのは、日本選手権や全日本大会が実施される神戸や石川・輪島、山形・高畠だが、いずれも制限時間が設定されているため、高齢者が対象のマスターズには不向きだ。

そこで「マスターズにも競歩を」と情熱を持って北上総合運動公園内の公認競歩路に時間制限のないマスターズ競歩を誘致したのが八重樫輝男さんだ。マスターズ陸上に競歩開催をと、踏み切る前の2004年、北上市で全国スポーツ・レクリエーション祭陸上大会を開くに当たって、その前年に全日本マスターズ陸上の長距離・競歩大会を試みている。

競歩をマスターズ陸上へ、と執念を燃やした八重樫さんとは——。

八重樫さんは岩手県出身。陸上は高校生のときから親しんでおり、競歩の道に踏み込んだのは、岩手大に進学した2年生(1959年)から。当時は学生選手権に競歩種目はなく、選手もいなかった。唯一、学生が出られる大会が1月1日に神宮外苑で行われる元旦競歩だった。

八重樫さんは60年の元旦に初めて参加した。20km Wに申し込んでいた

が、主催者側から「20kmは無理だろうから10kmへ」と助言があり、種目変更で10km Wに挑んだ。初挑戦だったが、4位に食い込んだ。

学生選手の参加は初めてだったようで、珍しさもあって、64年に開催される東京五輪に向けての「強化合宿」への参加を勧められた。助言者は陸連の競歩担当だった成田勘二郎さん。八重樫さんは喜んで参加し、より競歩にのめり込んだのはここからだ。

東京五輪の1年前、63年に山口で開かれた国体20km Wに初出場した。八重樫さんが岩手代表として山口国体に出られたのは、20km W五輪強化候補になっていた鎌田章さん(富士製鉄釜石)に県予選で勝って代表となったからだ。

レースでは国体初出場とあって、八

重樫さんは緊張した。スタート直後は最下位だったが、7番目にフィニッシュした。「まずはホッとしました」が口を突いた。

この後、64年に新潟、66年の大分、67年には埼玉の各国体に出場して、3位が1回、7位2回だった。このなかで新潟国体ではトップ争いから脱落し、19km地点で棄権して陸連強化委員から大目玉を。ほろ苦い思い出だ。

八重樫さんは岩手大を出た後、県内の高校教諭となり、物理を教える傍らジュニアの普及に力を入れた。90年には県内だけでなく、県外のジュニアを対象に強化を努め、5期10年間、陸連強化委員に任命された。

先に述べたとおり、国体初出場した山口には強い思い出があり、23年に山口開催となった第44回全日本マス



22年の一閃競歩で出場選手と写真に納まる八重樫さん

ターズ陸上選手権のM80・3000mWに出てみた。練習時間が取れないままの出場だったが、25分45秒88で4人中、2位となった。

インターハイに競歩が実施されていなかった時代に、競歩をと採用に努力した人でもある。八重樫さんは岩手マスターズの理事長を務め、現在は会長だ。17年11月に交通事故に遭い、胸部骨折、翌年には脳血栓で入院したりしている。

ただ今は「岩手競歩を支援する会」の理事長も兼ねており、多忙はまだ続く。北上市在住の84歳。

同連盟事務局長の高橋紀子さん（63歳）は八重樫さんの“人となり”をこう話す。

「真面目な反面、ちゃめっ気があり、気さくな方で、カラオケにも気軽に応じたり。岩手県民の誇りであるリオ、東京両五輪に出た高橋英輝選手や、22年の世界競歩チーム選手権に出場した高橋和生選手らを高校時代に指導した人でもあります」と。

2023年6月に100m37秒77 早川武子さん（95歳・岩手）

岩手マスターズ陸上の情報誌、「ヨロ」の7号（2023年夏号）の表紙を飾ったのが早川武子さん（岩手）だ。

情報誌の略称である「ヨロ」は英語の「Your Only Life Once」（あなたの一度きりの人生）の頭文字をつなげたもので、岩手マスターズ陸上競技連盟の趣旨である「一度きりの人生を悔いなく楽しく駆け抜ける人を応援します」の意味だ。

95歳、5月には96歳になる早川さんは、まさにこのロゴにぴったりのシルバー・スプリンターなのだ。ヨロの7号の表紙に登場したのは昨年の6月18日、同県金ケ崎町の競技場で行われた第42回岩手マスターズ選手権のW95・100mに30秒77の力走でフィニッシュしたからだ。

この日、早川さんはまず小雨のなか、60mに挑み、20秒03の東北創立記録を出し、勢いに乗った。雨上がりのレ

ースとなった100mは「懸命に走っている早川さんは95歳。ご注目を」と流れる場内放送を耳に、笑顔でフィニッシュラインを駆け抜けた。

同時に沸き起こった大きな拍手、また拍手。数人のランナーが年齢に関わりなく、早川さんに駆け寄っては抱き込んだ。早川さんの一族も応援に駆け付け、声援を送ったが、その数は何と10人以上。

早川さんがアナウンスさせたW95クラスの30秒77は、2010年に出ていた35秒48の上をいった数字だ。いわゆる日本新！

この早川さん、1928年5月、一関市東山町生まれ。マスターズ陸上への入会は2020年の92歳で。コロナ禍のなか、特別に開かれた北上記録会のW90・60mに初挑戦、17秒88で走った。以後、60mと100mに挑み続けている。レース中も満面に笑みを浮かべながらの姿は、見る者を魅了。熱烈なファンが多く「岩手のアイドル」となっている。

早川さんが92歳でマスターズ陸上に登録したいきさつはこうだ。早川さんのお孫さんが「祖母は60歳過ぎにシルバースポーツに入り、地区の運動会に出たりして、結構走っているの」と言っ、岩手のマスターズ陸上に登録したのが92歳のひと月過ぎだった。

それから上記の北上記録会を皮切りに、同年（2020年）の一関記録会から60mと100mに挑み続けている。走るのがいかにも楽しそうに、トレードマークのほほ笑みを絶えず走り切った後「楽しかった！」と言言。

早川さんは岩手マスターズ選手権を走った後、7月下旬に山形県天童市であった東北マスターズ選手権へ。100mは岩手大会より悪かったが、60mは18秒13でW95クラスでの自己ベストを出した。この記録は19秒35の日本記録より上だ。

が、岩手大会より前に広島でW95クラスの60m、100mで早川さんが出した記録より、良いタイムが出たことが分かるも、当の早川さんは動ずるこ



満面の笑みで「ヨロ」の表紙を飾った早川さん

とがなかった、と。早川さんにとっては「タイムより、走って楽しむこと」が身上なのだ。走るときの集中心は「ナニクソ精神」に尽きる。

話を戻して、東北マスターズ陸上に早川さんが出たとき、ここへも早川一族の家族応援団が出掛けた。その数は岩手大会と同じく、10人以上とにぎやかだ。レース終了後、武子さんの希望で、天童見学のツアーに変わったとか。

宮城県気仙沼市に住む次女の小野寺由希子さん（64歳）の話によると「母は今でこそ元氣ですが、幼少の頃は体が弱く、学校に通うようになって、学校からの通信簿には〈安静にして療養を要す〉と書かれていたそうでした」と話す。

とにかく歩くことが好きで、勤めている頃は自宅から仕事場まで片道30分ほどをかけて通っていたそう。60歳過ぎにシルバースポーツに入った頃にはすっかり丈夫になった。武子さんは陸上の経験は全くなかったが、13年前に57歳で亡くなった長男・信夫さんは中学生の頃から陸上一筋で、陸協の役員を務めていた。

由希さんも高校までは短距離で頑張った。今では母・武子さんの熱心な応援者だ。